養蚕

白川郷の主要産業のひとつは、蚕を飼って絹糸を生産する養蚕だった。養蚕は、稲作などと違って平坦な耕地を必要としないため、地元の住民の間に定着した。また、この地域には蚕の餌となる桑が豊富に自生している。

養蚕は合掌造りの家屋の屋根裏、つまり村人が生活する場所の真上で行われていた。このことは、合掌造りの屋根の設計や構造にも大きな影響を与えた。例えば、屋根の角度が急な形状は、何段にも重ねることができるため、養蚕のためのスペースを確保するために用いられた。一方、屋根の両端（切妻）にある軽量の障子窓は開けやすく、蚕のために十分な採光と換気を可能にした。屋根の厚い茅は断熱性に優れ、暑い夏でも栽培が可能であった。

絹織物の生産は貴重な副産物も生み出した。おそらく最も重要な副産物は、火薬の原料となる煙硝（硝酸カリウム）であろう。煙硝の主成分のひとつは蚕の排泄物で、藁、土、ヨモギなどと混ぜて3〜4年発酵させる。こうしてできた混合物を精製し、煙硝の結晶を取り出した。煙硝は水に溶けやすいので、村人は囲炉裏の近くの雨の当たらない穴で製造した。

白川郷では1700年代には養蚕が行われていたことが確認されている。江戸時代（1603-1867）の最後の数十年間、日本は鎖国政策をやめ、西洋諸国との貿易を始めたが、その時期に絹は特に貴重な輸出品となった。村では1970年代まで養蚕が続けられた。

荻町集落にある和田家住宅は、白川郷最大の合掌造り家屋である。煙硝と絹糸の生産と貿易で財を成した和田家のものであった。